



第4回

昆正人氏

制度の中に生きる「人」

取材担当：小林薫子、谷口太郎、長川美里

(RJIFインタビュー)

昆さんは、どういった人生を歩んでこられたのでしょうか。お話しいただけますか。

いいですけど、結構めちゃくちゃですよ。

そういう話こそ、きちんと伝えたいと思っているので……。

ものごころついた頃は町田の方において、そこから相模原へ移りました。母が義理の父親と再婚したので、そこで小学校三年生くらいまで過ごしていました。父が家庭で暴力をふるうので、母と逃げ回るような生活でした。

母と逃げていたんですけど、母親も糖尿病にかかってしまった。そのせいで目が見えなくなって。中学一年の頃ですね。そこからは母親の面倒を見ていましたね。ずーっと。学校にも行きながら。まだ働き始めてはいなかったです。母親がその状態だったので、生活保護を受けていました。最初は部活動なんかにも入りたかったんですが、その状態だと部活もできない。だから学校が終わったら家に帰って、一緒に買い物とかに行くような生活でした。母の容態は一応セーフだったので、高校にも行けま

した。頭悪かったので、都内の一番下の高校ですけど。高校に入った後もずっと見ていたのかな。その当時から、バイトはやってましたけど、働いてはいないです。

高校卒業してすぐに酒屋へ入りました。10年くらい仕事をしましたが、母の糖尿病の合併症がひどくなっちゃって。働けなくて辞めることになりました。くも膜下出血とか、心臓のバイパスの手術とかが一年間で連続して起きちゃいました。一緒にいなきゃいけないな、ということになりました。病院からも「どうなるかわからないからいてくれ」と言われてしまって。仕事も休みがちになっちゃって、一週間とか二週間とか休むハメになっていたので、働き続けるのは厳しいなと思いました。

その後、3年間くらいはずっと見ていたんですよ。結局、脳出血で寝たきりになり、病院任せにするしかなくなってしまった。その後は仕事を転々としています。人や環境がまったく合わなくて。

人生の前半を、とても長いお時間を使ってお母様を看られてきたんですね。

面白かったといえば、面白かったですけどね。自分しか見る人間がないし、頼ってくれるから。中にはそれが負担になっちゃう人もいると思いますが、考え方次第ですよ。

勉強にもなりました。他人との接し方や、周りの人からどう見られているかに気を配るようになったのです。目の見えない人と一緒に歩いていると、周りの人って結構変な目で見たりするんです。ちょっと当たっただけでも怒鳴ってくるおじさんがいました。そういう人を見ていると、「どうなんだろうな」と思いましたね。



Photo : RJIF

「はまかぜ」はどうやって知られたのですか。

以前は都内の施設にいました。仕事がちゃんとできなくて、お金が貯まらなくて、家も借りられませんでした。

「はまかぜ」のような自立支援施設があると聞いていたので、ひとまず横浜へ行って、話をしてみようかなと思いました。役所の方と「都内では失敗しちゃったので、今度は失敗しないようにしたい」と話をして、こちらへ来ました。結局仕事を探すにも、住む家、住所がないと探せません。身分証や免許証とかがあるだけでは雇ってもらえない。こういう施設を利用するしかなかったです。

この施設、「はまかぜ」での暮らしはどうか。

別に困ったことはないです。ご飯は想像以上においしくいただけます。厨房があってしっかり作ってくださっているようなので。

私たちは、生活困窮者自立支援法という法律・制度が上手くいっているかを調べているのですが、この法律の名前はご存知ですか。

一応は。具体的な内容はわからないですけど。そういう名前は聞いたことがあります。

生活が苦しい人を助ける制度は、うまく働いていると思いますか。

生活困窮者というか路上生活をしている人たちの中でも、「施設に入ろう」と思っている人は仕事にやる気があります。そういった人たちは施設に入って、自立もできるんですけど、中には「一時しのぎ」「寒さしのぎ」という形で入居する人もいます。そして、「施設は利用したくない。俺はこのままでいいんだ」と考える人もいます。

法律や制度がうまく働いているかどうかと言えば、仕事を無くしてにっちもさっちもいなくなっている僕のような人からしたら、助かっていると思います。自分みたいに仕事をなくして、住む家もなくて、それでも仕事がしたいと考える人間にしてみたら、こういう法律があって本当に助かるとは思いますがね。仕事がしたいと考える人間は、制度を利用すれば建て直しができるので。

一方で、お年寄りなどは、病気もあってつらいので、外での生活はかなりきついのだと思います。だから、次の生活保護の許可が降りるまでの間「一時しのぎとして施設に入れたら」と思っていられる方も多いのかもしれませんが。役所の方も同じ考えで施設に入れているようです。

そういった状況にあって、昆さんはどういうふうに「仕事するぞ」という気持ちを保っていらっしゃるのですか。自分自身の芯をどうやって作っていらっしゃるのでしょうか。

考え込むと身が持たない。だから気楽に過ごしています。仕事を探さない日、面接が無い日なんかは、「何して遊ぼうかな」としか考えないですね。ぼーっとしています（笑）。

「自分はこうあらなきゃいけない」と考えすぎるからよくないと思うのです。たとえば、自分が行きたい会社の面接に落ちたとき、心がどーんと沈む。そうならないように、面接のときにもあまり考えない。受かった後も、自分の思い・考えは捨てないで仕事をして、合わなければ上司だろうがなんだろうが、反発して文句を言えばいいと思っています。

仕事場の人や環境と合わなかったとおっしゃいましたが、どんな状況だったのですか。

自分が納得しないから辞めた、ということが多かったです。お客さんを相手にした仕事であれば、お客さんへの対応の仕方が自分の意見と合わないことがありました。幼稚園の職員の時も、介護の仕事の時も、利用者さんを思いやらない方針に納得がいなくて、口論になって辞めました。

酒屋の配達をやっていたときも、お客さんと長い世間話にふけることが多かったです。1時間くらい話しこんだときもあったんですよ。配達業って時間厳守なのに。会社では「そんなことやってんじゃない。ちゃんと仕事しろ」って怒られました。でも、「お客さんと話すのも仕事のうちでしょ？」と

考えていましたね。配達だからって、モノを運べばいいってもんでもだけじゃない。お客さんとコミュニケーションをとることも仕事だと思うのです。このやり方を貫いていたので、お客さんの方からの苦情はほぼなかったですね。どちらかという会社の方の苦情が自分の方に入ってきました（笑）。

世の中の仕事って、お客さんと関わる仕事ばかりじゃないですか。だったら、まずお客さんのことを考えるべきです。その考えと合わなければ、年上だろうが、上司だろうが関係なしに、意見は言いました。クビにするならクビにしろと思っていました。自分が納得できない仕事はしたくないですし。



今後、ご生活はどのようなのですか。

介護ヘルパーの資格を取ったので、そちらの道で頑張ろうと思っています。お年寄りの方と喋るのは勉強になるので好きです。自分より人生経験は上ですし、困りごとを相談するとアドバイスをくれます。認知症の方であってもしっかりしたアドバイスをくださるんですよ。認知症だから何も出来ないのではなくて、顔を合わせてお話しすると、しっかりしている人は結構しっかりしています。

給料は安いし、きつい仕事は多いですが、この介護の仕事はどんなに年をとっても勉強できるし、学校とかでは教われないような、人生の勉強ができると思います。ものすごく良い仕事ですよ。

最後に、若い人たちに向けて何かアドバイス等があれば頂けませんでしょうか。

“すべて気持ち次第。あとはどうにかなる”

すべて自分の気持ち次第だと思います。若かるうが年をとっていようが、気持ちをしっかり持っていれば、どんなことがあっても大丈夫だと思う。気持ち・信念の軸を、自分がこうと決めたら曲げなければいいと思う。あとは適当にやっていればなるようになると思います。